

Peter W. Edbury;

The Kingdom of Cyprus and the Crusades, 1191-1374.

櫻井康人

最近、十字軍関係の研究書が多数出版されているが、それらを見ると十字軍研究が新たな局面を迎えていることを感じさせる。十字軍国家史及び十字軍史の両面において多大なる業績をあげ、十字軍研究の第一人者としてのステータスを確立している Jonathan Riley-Smith は、近年十字軍理念研究をその関心の中心にしており、彼の弟子達がそれをより充実させている。近年では Norman Housley, *The Italian Crusades*, Oxford, 1982. や Elizabeth Siberry, *Criticism of Crusading, 1095-1274*, Oxford, 1985. 等がその成果として著述することばかりである。又、この最近の Marcus Bull の著書 *Knighthly Piety and the Lay Response to the First Crusade*, Oxford, 1993. は、十字軍十字軍士となった騎士の心性について Christoph T. Maier の *Preaching the Crusades*, Cambridge, 1991. は、十字軍の説教とそれに携わったフロンシスコ、ドミニコ修道会について論じており、Riley-Smith

学派を中心とした十字軍研究の多様性を物語っている。又、騎士修道会についての著作がここ最近になって相次いで出版されているのも特筆すべきことであろう。

しかし、多様化する十字軍研究の中でも、エルサレム王国史研究を中心とする十字軍国家研究に関する著作はほとんどその姿を見せぬ。かといって一九五〇～七〇年代には Jean Richard, Joshua Prawer, Hans Eberhard Mayer や Riley-Smith 等がエルサレム王国について活発に論じて多数の名著を残した。が、Riley-Smith の著書 *The Feudal Nobility and the Kingdom of Jerusalem, 1174-1277*, London, 1973. をとって十分に考察がなされたと考えられているのか、近年エルサレム王国に関する本格的な研究書は Steven Tibble の *Monarchy and Lordships in the Latin Kingdom of Jerusalem, 1099-1201*, Oxford, 1989. のみである。この Tibble はエルサレム王国における騎士修道会やキプロス王国の重要性を示唆しているが、この指摘こそ今後のエルサレム王国史研究の大きな課題である。つまり、騎士修道会、イタリヤ諸都市、ブルジョワ（十字軍国家在住の西ヨーロッパ人）勢力やキプロス王国といった封建関係外要素がエルサレム王国では非常に大きな役割を担っており、これらの十分かつ有機的な考察なくしてはエルサレム王国史研究は大きな課題を持ち続けることとなるように思われる。こういった問題が想起される中で、上記の Tibble の示唆を受ける形となつて一九九一年に出版されたのが本書である。

かといって Riley-Smith に師事した著者が、現在では十字軍研究にとつては欠かせない研究者の一人であり、中でも十字軍国家史

研究において多数の業績を残している。本書は、近年 Richard 等の発表した数本の論文を除いては、George Hill による名著 *History of Cyprus*, 4 vols. Cambridge, 1940-52. 以降殆ど研究されてこなかったキプロス王国史研究において、久々の本格的な研究書であるという意義を持つ。膨大な史料を基に、主に政治史、外交史のコンセプトからキプロス王国にアプローチしている本書は、十字軍時代のキプロス王国像を描くのに成功していると言えよう。又、本書はエルサレム王国史研究にとっても非常に有益な研究書であるという意義も持つ。従来の研究においてキプロス王国とエルサレム王国との密接な関係はよく指摘されており、エルサレム王国史の勉強に着手し始めたばかりの評者にとって、本書は大変重要な示唆を行ってくれる著作である。本書の題名からも、又本書が一三七四年のジェノヴァ侵入までを扱っていることから、著者があくまでも十字軍国家としてのキプロス王国を描いていることは言うまでもない。上記の如く、以前よりエルサレム王国にとつてのキプロス王国の重要性は指摘されていたが、その十分な考察は為されておらず、その点における本書の重要性は大であり、今後の十字軍国家史研究に影響を与えていくことは間違いないであろう。

本書は九つの章からなり、内容が広範囲に亘るため個々の事例に対して詳細に検討することは出来ないが、以下各章について簡単に紹介・解説し、最後に全体の問題点について述べたいと思う。

1. Conquest

本章では先ず第三回十字軍から一五世紀末のヴェネチアによる

キプロス併合までの概観を簡単に述べた後に、一一九一年のリチャード一世によるキプロス占領の背景について記述している。十世紀中ごろ迄、キプロスは西ヨーロッパにとつてさして重要性を持たず、ビザンツ支配下のギリシア人とアラブ人の「共同体」であった。しかし、第一回十字軍の成功によりキプロスは政治的、経済的に大きな転換点を迎えることとなる。著者は、その転換の一つとしてビザンツの小アジアにおける覇権の回復を、もう一つとしてイタリア諸都市を中心とする地中海経済の復活を挙げている。前者の影響は、キプロスにビザンツ帝国の官僚的支配機構が移植されたことであり、このことは八章でも詳しく述べられている。しかし、後者については殆ど触れておらず、イタリア諸都市の植民活動・経済活動・軍事活動等の実態についての考察の必要を感じさせる。なぜなら、本書中でも随所にイタリア諸都市について触れていることから明らかであるが、キプロス王国にとつてのイタリア諸都市の果たす政治的、経済的、軍事的役割があまりにも大きいからである。

2. Settlement

本章では、キプロスの地理・農業・人口・キプロス内主要都市間の移動日数等が紹介された後で、ギー・ド・リュジニャン以降の植民政策・支配政策について叙述されている。

一一九二年春にキプロスを手に入れたギー・ド・リュジニャンは、アッコ、アルメニア、アンティオキア等から軍人・職人や更にアラブ人をもキプロスに呼び寄せ、封を与えた。同時代史料によるとその結果三百の騎士が創出されたと記されていることに

対し、著者は騎士の創出がそれほど多くなったことを示している。キプロスに流入してきた者は、ギー・ド・リュジニヤンの出身地であるポワトゥ出身の家系の者が多く、ハッティーンの戦いにより土地を失った者ばかりであり、トロン領主オンフロワ以外は比較的身分の低い者達であった。いずれにせよこれらの者達はギー・ド・リュジニヤンとコラード・デル・モンフェラートの争いの際、ギーの側に付いた者達であった。

続いてギー・ド・リュジニヤンによるキプロスの支配形態についての考察が為されている。ラテン人によるキプロス支配は支配階級・支配体制そのものを変えた。即ち、ギリシア人支配者の駆逐、エルサレム王国の法の導入である。しかし、被支配者に対しては「妥協的」であり、その事はビザンツ支配時代の貨幣の継承、ギリシア正教会の存続等に表されており、短命に終わったテンブル騎士修道会の支配と対照的に、リュジニヤン家によるキプロス支配は然したる反乱もなく維持されるのである。ここで扱われる現地人支配問題についての考察は十字軍国家史研究においてこれまで殆ど為されておらず、今後の課題として残される必要なテーマの一つとなるであろう。

3. The Lusignan dynasty

評
書
本章は前半においてリュジニヤン家のラテン・シリアでの台頭を史実に沿って叙述している。リュジニヤン家がエルサレム王国に姿を現したのは、一一〇二年にギーの曾祖父ユーグ六世がラムラの戦いに参加した時である。ギーの父、ユーグ八世もシリアに到来していた。一一五四年よりイングランド王家の家臣であった

リュジニヤン家だが、一一六八年、一一七三年にアモーリー、ジョフロワ、ギーの三兄弟がヘンリ二世に対し反乱を起こした。著者はその事件を契機として彼らがエルサレム王国へ渡ったと考える。当然ヘンリ二世に対する反乱も大きな要因であったであろうが、上記の如くリュジニヤン家が代々十字軍士家系であったことも忘れてはならないであろう。

本章後半においてはギーの後を継ぐこととなったアモーリーの政策について考察が為されている。ギーがキプロス支配の基礎を作ったのであるならば、アモーリーはキプロス支配を確立したといえる。著者は、アモーリーによるキプロス支配の確立を、教皇の承認を得たラテン教会制度の確立、神聖ローマ皇帝ハインリヒ六世からのキプロス国王承認、エルサレム国王アンリ・ド・シャンパーニュとの和解の三つの点から論じているが、その際、著者がこれら三点の背景にビザンツやムスリム勢力の脅威との関連を見ていることは非常に興味深い。なぜなら、十字軍国家について論じる場合には、特に対ムスリム臨戦体制ということの考察が必要であると、評者には思われるからである。さて、エルサレム国王との和解の結果、又一一九七年以降アモーリーがエルサレム国王を兼任した結果、エルサレム・キプロス両王国の關係が密になり、以後ラテン・シリアの防衛においてキプロス王国が軍事的・経済的に重要な役割を担っていくこととなるのである。

4. The House of Ibhin

前章ではキプロス王権を担ったリュジニヤン家についての考察が為されたが、本章ではキプロス・エルサレム王国において最有

力貴族家系であったイブラン家についての考察が為されている。イブラン家は一一四〇年代にエルサレム王国内に所領を得、婚姻政策等によりハッティーンの戦いまでに王国の最有力貴族の一つとなっていた。上記の内紛の時期にはリュジニヤン家と対立していたイブラン家が、キプロスに進出したのは一二一〇年代であり、著者はその原因がエルサレム國王ジャン・ド・ブリエンスとイブラン家の闘争であったことを明確に示している。そして神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世の介入による内乱 Civil War の結果、イブラン家はエルサレム・キプロス両王国において最有力貴族としての地位を確立するのである。この章で最も興味深いのは、著者が「イブラン家はあくまでもキプロス國王の家臣であった」ということを強調している点である。一般的に、同時期のエルサレム王国ではイブラン家は國王をも凌ぐ最有力者であったとされるが、ここで著者はキプロスでは王権がイブラン家を抑え込める程に強固であったことを前提としていることが解る。

5. The Defence of Latin Syria

本章では先ずキプロス王国によるラテン・シリア防衛（十字軍参加、その他の出兵）の具体例が列挙され、次いでキプロス・エルサレム両王国に所領を持っていた聖界諸侯・騎士修道会・貴族・キプロス王家のキプロスでの収入がラテン・シリア防衛に利用されていたことが示されている。

さてエルサレム王国からの皇帝軍撤退後、エルサレム國王コンラート二世の摂政として先ず前キプロス國王ユージング一世の未亡人アリス・ド・シャンパーニュ、次いでその息子でありキプロス國

王でもあるアンリ一世が選出されるが、ここで著者は二つの重大な見解を与えている。先ず一つはアリスやアンリ一世がエルサレム王国に介入した理由をエルサレム王国の富に帰す点である。エジプトとの条約により、一二四〇年代のエルサレム王国は一三世紀において最大領土を誇り、従ってその商業を中心とした収益も多かったのである。この事は、エジプトとの条約はダマスカスとを結ぶ重要な商業ルートの断絶を意味したという Riley-Smith の指摘に反対するものである。しかしここで重要であるのは、ラテン・シリアの防衛に要する費用がエルサレム王国からの収入よりも多額であった可能性が考えられることであり、詳細な検討なくして一概に著者の見解が正当であるとは言えないのではなからうか。さてもう一点はエルサレム國王（摂政）と十字軍士の関係である。アンリ一世の摂政時代はほぼ聖王ルイの十字軍期と一致しており、エルサレム王国の運営は聖王ルイに委ねられていた。このように、有力者率いる十字軍の滞在期にはそのリーダーがエルサレム王国において強大な権力を持つ。この事はエルサレム王国の権力構造を考察するにおいて重要な点となろう。

6. The Reign of Henry II

本章では、一二九一年のアッコ陥落以降地中海東部において対ムスリムの前線となったキプロス王国について、アンリ二世の統治時代を中心とする叙述がなされている。アンリ二世統治時代の前半においては、教皇の呼掛けによる十字軍計画、ムスリム（マムルーク朝）との貿易禁止、ジェノヴァ・テンプル騎士修道会・ヨハネ騎士修道会との関係悪化等が背景として描かれている。

後半は、アンリ二世のイル汗国との提携失敗の背景や、それを原因としたアンリ二世とその弟のアモーリーとの争いによる内紛の状況が詳細に考察されている。

本章に見られるように、著者がキプロス王国の政治史を考察するにあたって、イタリア諸都市や騎士修道会等の外部要素との関係から検討していることは、今後の十字軍国家史研究のありかたに重要な指針を示しているように思われる。

7. *Dynastic Politics, Commerce and Crusades, 1324-1369*

本章で扱われるユーグ四世、ピエール一世時代はキプロス王国史において最も十字軍活動が盛んな時期であった。それはユーグ四世時代に教皇が中心となり二度に渡って締結された対トルコ同盟や、ピエール一世によるアレクサンドリア攻撃に代表される。

著者は、この時代の、主としてピエール一世時代の十字軍活動が単なる聖地國家復活を目的としたのではなく、商業的復活を目的としていたことを示している。そのことは、ユーグ四世が貿易相手国であるマムルーク朝を攻撃することはなかったのに対し、ピエール一世が貿易競争相手であるアレクサンドリアを攻撃目標としたことから明かである。その背景として、交易ルートの変化（内陸ルート→紅海・黒海ルート）や黒死病による人口減少の結果生じたキプロス王国の経済衰退が述べられている。これらのピエール一世に関する指摘こそ、本書の中で最も重要なものであり、最も著者が力を注いでいる点でもある。つまり、IIIを中心とする従来の研究者の描くピエール一世像は理想主義的色彩の強い

ものであったが、著者は上記のことを背景に、ピエール一世は現実的な策士、戦略家かつ経済的合理主義者であった、とその像に再評価を加えるのである。

8. *Kingship and Government*

これまでの章ではキプロス王国の外交、貿易、十字軍や様々な事件についての史実的事項を詳細に検討し、従来の説に修正・反論を加えてきたのに対し、本章ではキプロス王国の内政についての考察が行われている。

先ず *seneschal, constable, marshal* や *chamberlin* を初めとする様々な役職についての考察が為されているが、本章において最も重要であるのは以下の点である。一般の見解ではキプロス王国の行政機構は西ヨーロッパや主にエルサレム王国のものが移植されたものである、とされてきた。キプロス王国の行政の中心となるのはエルサレム王国と同じくオート・クル（国王の封建家臣達から構成される会議）であり、エルサレム王国においてはその役割についての考察が様々な結論を導きだしているのに対し（八塚春児「エルサレム王国国制史研究の諸問題」『桃山歴史・地理』16・17合併号、一九八〇年、16—26頁等参照）、キプロス王国では王権が強固であるとされてきた。著者は様々な点からこの事を暗示的に裏付けている。それらは即ち、広大かつ要所となる王領の保持、諸権利の独占（交通、貨幣鑄造、塩の製造販売等）、私的なカウンセラーの団体による行政機関（*Royal Council*）の存在、外国人による軍隊の形成、クル・デ・ブルジョワの管理である。著者がこれらの支配体系をビザンツ支配起源のものと考

えているのは、非常に興味深い点ではある。しかし、第二章において示された如く、キプロスに渡ってきたのは、リュジニャン家に関わりが深く、比較的出自の低い者達であった。このことを考慮に入れると、リュジニャン家が王国成立初期に強力な王権支配体制を形成し得たであろうことは予想されるのではなからうか。

9. *Climateric*

最終章である本章において、著者はピエール一世の暗殺からジエノヴァとの戦争までを中心に論じている。ジエノヴァとの戦争の結果、キプロス王国は衰退し、再び勢力を取り戻すことはなく、遂にはヴェネチアの支配下に置かれることとなる。

ジエノヴァとの戦争は、単にリュジニャン家支配のキプロス王国の没落を促しただけではなかった。今日までのキプロスの情勢を考えると、ジエノヴァとの戦争はキプロスそのものの没落の契機となったように思われる。このことを思うと、著者が本書を「リュジニャン家支配のキプロスはその歴史の中で最も輝かしい時代の一つであった」と締め括っているのも決して誇張ではないように思われる。なぜなら、リュジニャン家はキプロスを「キプロス王国」という一つの國家として統治し得たからである。

以上が本書の概観であり、各章において気付いた点はその都度指摘したが、最後に全体を通して気付いた点を三つ程挙げたいと思う。第一点は、本書の序文で述べられているように、著者がキプロス王国を考察するにあたって意図的に社会史、経済史の側面を除去したためか、全体としてナラティヴで事実の羅列という感

じを読者に与える点である。このため、本文中には数多くの著者の見解が盛り込まれているにも関わらず、本書を平板な概説書の類におとしめる危険性をはらんでいるように思われる。第二点は、本書の題名に「十字軍」と明記されている割には、十字軍運動（特に一二九一年以降）内におけるキプロス王国の位置づけが明確なヴィジョンをもって表されていないことである。確かに随所に十字軍について触れられてはいるものの、それでは果して十字軍にとってのキプロス王国とは、又キプロス王国にとっての十字軍とは何であったのか、という単純な疑問を残さざるを得ない。

最後の点は、キプロス王国とエルサレム王国の關係がよく示されているのとは対照的に、キプロス王国とイタリア諸都市や騎士修道会との關係が明確に示されていない点にある。本書では、考察の手段としてイタリア諸都市や騎士修道会について触れられてはいるものの、それらの勢力のキプロス王国における実態についての考察は為されていない。上述の如く、莫大な経済力と軍事力を所持し、十字軍國家を支えていたイタリア諸都市や騎士修道会が、十字軍國家に対して大きな影響力を持っていたことは容易に想像される。これらの封建外要素の考察こそ最も重要な点であり、今後の十字軍國家研究の大きな課題となるであろう。

しかし、政治史・外交史を中心に自然・軍事を初めとする様々な側面からキプロス王国を捉え、又様々な今後の課題を提示している本書は、久々の本格的なキプロス王国研究書であるばかりでなく、今後の十字軍國家史研究に新たな可能性を与える良著であることは間違いない。特に、今年一九九五年が十字軍掲唱から九〇〇年目を迎えた記念すべき年であるが故に、本書を契機として

我が国では研究の乏しい十字軍・十字軍国家史の研究が盛んになることを願いたい。

(A4判変形 二四一頁十一四頁 一九九一年 Cambridge \$ 59, 95)

(京都大学大学院修士課程

)